

【暗唱聖句】ガラテヤ 3:11

「律法によってはだれも神の御前で義とされないことは、明らかです。なぜなら、「正しい者は信仰によって生きる」からです」

【日曜日・カルバリーを思い描く】

私たちが救われるのは、新しい契約ではもちろんのこと、古い契約のもとでもキリストに対する信仰により、神様の愛と恵みによって与えられるものです。神様の愛は無限です。愛は死よりも強いことを、イエス様はお示しになりました。イエス様は平然と十字架にかかったのではありません。

ルカ 22:42~44 「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」〔すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。〕

イエス様は、「この杯をわたしから取りのけてください」と言い、苦しみもだえ、汗が血の滴るように地面に落ち、天使が天から現れて力づけなければならぬほどでした。しかし、この苦しみは十字架で死ぬことに対する苦しみではありません。全人類の罪がイエス様の背中に押し寄せてくることによって、父なる神様と引き裂かれてしまったように感じられたのです。罪とは、神様から離れること、神様からの断絶です。イエス様は「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ 15:34）と叫ばれて息を引き取りましたが、人類の罪を一身に背負った結果、神様から見捨てられたかのように感じられたのです。このカルバリーの十字架を瞑想するとき、私たちは深い感情が呼び覚まされ、神様の愛に満たされることでしょう。エレン・G・ホワイトは次のように述べています。「汚れなきキリストが、これほど痛ましい死をしのび、世のすべての罪の重荷を背負われたのだから、我々の思いや想像力では、決してそれを完全に理解することはできない…比類のない救い主の愛の深さを熟考するとき、心は満たされ、魂はその愛に溶かされ、愛情は清められ、高められ、そして、品性全体が完全に作り変えられるのである」教会への証 P 212、213

【月曜日・契約と犠牲】

「知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです」第一ペテロ 1:18

ペテロは、「贖われた」と言っています。贖うとは、当時、奴隷が解放される時、代価が支払われたという思想をベースにしています。同様に、私たちが罪の奴隷から贖われ、解放されたわけですが、その際に支払われた代価は、金や銀のような朽ち果てるものではなく、キリストの命でありました。キリストの命を、「きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血」と表現していますが、キリストの血は朽ち果てることなく、永遠の効力を持っています。これが契約の基礎となっているのです。旧約時代には、キリストを象徴する犠牲の動物が捧げられたのですが、今は実際にイエス様がその命を捧げて下さったので、動物を捧げる必要はなくなりました。

ローマ 6:23 「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです」

第一ヨハネ 5:11~13 「その証しとは、神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと、そして、この命が御子の内にあるということです…神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。」

パウロもヨハネも、手紙の中で、イエス様が永遠の命を与えて下さったことを伝えています。イエス様がその命を捧げて下さったおかげで、逆に私たちは永遠の命をいただくことができるようになりました。イエス様が命を捧げるということは、人類が受けるべき罪の刑罰の代わりです。ただ死なれたのではなく、罰を受けて下さったのです。その結果、わたしたちは罪が赦されたので、永遠の御国の門を通過して中に入ることができるようになったのです。

【火曜日・アブラハムの信仰：その1】

創世記 15:6 「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」

アブラハムは、神様から「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる。」（創世記 15:5）と言われたとき、その言葉を信じました。神様はアブラハムが素直に神様の言葉を信じたのを見て、それを彼の義と認められました。信仰による義についてパウロが繰り返し述べていますが、決して新約になってから出てきた思想ではなく、創世記

です。すでに教えられていることがわかります。事実、パウロはローマ人への手紙 4 章の中で、この創世記 15:6 を引用しています。その際パウロは、「もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません」(ローマ 4:2) と言っています。アブラハムは神様から義とされましたが、それはアブラハムの行いが認められて義とされたわけではありません。アブラハムの信仰が義と認められたのです。しかしその信仰も、信じたり疑ったりを繰り返します。つまり微塵も疑うことなく信じ切っていたわけではないのです。その最も顕著な現れは、女奴隷ハガルに子どもを産ませたことです。現実的にサラが子どもを産むのは難しくなると、主の約束を女奴隷を通して子どもが与えられると拡大解釈したわけです。私たちも聖書の御言葉を文字通り信じきれないために、解釈を交えて信じることはないでしょうか？たとえば、5000 人分のパンと魚のイエス様の奇跡を、実は、そこに集まっていた人がお弁当は分け合うという優しさが生まれる奇跡だったのだというような。さらにアブラハムは、99 歳になったとき、来年子どもが生まれると主が語られたとき、ひれ伏して笑います。

創世記 17:16、17 わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福し、諸国民の母とする。諸民族の王となる者たちが彼女から出る。」アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。「百歳の男に子供が生まれるだろうか。九十歳のサラに子供が産めるだろうか。」

このようにアブラハムの信仰は、信じたり疑ったりを繰り返しているのです。これは私たちも同じかもしれません。それでも神様はアブラハムが主を信じたとき、それを彼の義と認めて下さいました。もちろん、アブラハムは一生をかけてその信仰を養っていききました。しかし、結局アブラハムの信仰による義も、神様からの恵みなのだとということです。

【水曜日・アブラハムの信仰：その2】

創世記 15:6 「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」の「認められた」という言葉は、ヘブライ語のハシャブという語が使われており、「～と見なす」という意味があります。本来はそうではないものを、そのように見なす。つまり、アブラハムは神様のような完全なる義人ではないけれども、神様は義人と見なして下さいましたということです。では、どのようにしてアブラハムは主から義と認めて下さったのでしょうか。それは主を信じたことによってです。星のように子孫が増えるという主の言葉を信じたことによって、義と認められたのです。義と認めるとは、原語では「ある一定の基準に合致した状態」という意味です。ここでは「神様とあるべき関係にあるということ」です。主は、主が語られた言葉を信じてほしいのです。そしてその言葉を生きてほしいのです。それが主とあるべき関係であり、義と認められるということなのです。義と認められるということに関して、ハードルが高いと感じておられる方もいますし、逆に軽く考えすぎている方もいるかもしれません。皆さんはいかがでしょう。

【木曜日・約束の上に憩う】

人生の最後を迎えたとき、自分が歩んできた道を振り返りながら、主と出会い、主と共に人生を歩んできたことに、ただただ感謝しかないことでしょうか。自分の功績で天国に救われるなどは思えません。むしろ罪が思い出されて悲しくさせられます。しかし主はすべてを赦して下さい、こんなわたしをも救って下さったのです。主の御言葉を信じて生きる人生には、平安に満ちています。人生を強めるいくつかの御言葉を紹介しましょう。

詩篇 34:8、9 「主の使いはその周りに陣を敷き主を畏れる人を守り助けてくださった。味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は」

目には見えませんが、いつも私たちは天使によって守られています。人生を振り返ってみたとき、それがよく分かります。人生の歩みの中で主の恵み深さを味わい知り、主の御元に身を寄せてきた人生が、いかに幸いだったかを知ることでしょう。

マタイ 11:28 「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。11:29 わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。11:30 わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

イエス様は、「疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われました。多くの人がこのイエス様の言葉によって救われました。イエス様のことを知らない人でも、この言葉にはひきつけられるようです。多くの重荷をかかえ、疲れているからです。いったい誰があなたを休ませてあげようなどと言ってくれるのでしょうか。では、どうやって休むのか。それはイエス様のくびきを負うことだと言われました。イエス様と一つとなるということです。後は、イエス様が引っ張って下さるのです。